

スペイン語の名詞 *arte* の文法性について

土 屋 亮

On the Grammatical Gender of the Spanish Noun *Arte*

Ryo Tsuchiya

Abstract

The Spanish noun *arte* varies in grammatical gender according to its number; that is, the singular form *arte* is masculine and the plural *artes* is feminine. The fact that the Latin noun *ars*, from which the Spanish *arte* is derived, was feminine leads us to think that Spanish had a period at some point in its history when the word changed its gender. In order to validate this hypothesis we collect, using the Real Academia Española's electronic corpora 'CREA' and 'CORDE', examples of *arte(s)* modified by the definite article and any adjective ending with -o/-a for the word to be tested masculine or feminine. Using CREA, the present-day Spanish corpus, we search for examples of *arte(s)* and confirm that the singular *arte* is used as masculine, as many dictionaries say it should be. Using CORDE, the diachronic corpus of Spanish from the 13th century to 1974, we search for examples of *arte* with three variants of the definite article appearing in a construction such as '*el/la/el arte* + [adv.] + adj.' to examine when and at what rate the word started to be used as masculine, and we indicate that the rate of appearance of the word *arte* used as masculine, at least in the construction in question, goes up to almost 50% during the 17th century, and it keeps increasing through the following century to reach 90% by the late 19th century.

1. 序

スペイン語の全ての名詞には、ラテン語から受け継いだ文法性 (grammatical gender) という文法範疇が備わっており、必ず男性名詞か女性名

詞のいずれかに分類される。しかし、現代スペイン語の名詞 *arte* には、単数では男性名詞として、複数では女性名詞としてふるまうという興味深い性質がある。このことは多くの文法書や辞書によっても記述される事象であるが、共時的な観点から見て、一つの名詞が数によって性を変えるのは、この *arte* 以外に例がない。また、通時的な観点から見れば、スペイン語 *arte* の元となったラテン語の *ars* は女性名詞であったので、ラテン語からスペイン語に至る 2000 年以上の歴史のどこかに文法性の転換点が存在したことになる。本稿では、スペイン語以外のロマンス語の状況を概観した後、スペイン王立アカデミーが提供している現代語および通時コーパスを用い、現代スペイン語において単数の *arte* が女性名詞として扱われることはないのか、何世紀ごろに単数 *arte* の文法性が女性から男性に転換したと考えられるのかを調査する。

2. スペイン語 *arte* についての記述

序で述べたように、スペイン語の名詞 *arte* は単数においては男性名詞として、複数では女性名詞としてふるまう。*arte* の文法性について、辞書で確認しよう。まず、スペイン王立アカデミー (RAE) と、スペイン語圏各国のアカデミーの集合体であるスペイン語アカデミー協会 (ASALE) の連名で刊行された、最新のスペイン語辞典 *Diccionario de la lengua española* (RAE y ASALE 2014) における名詞 *arte* の記述は、以下のようになっている。

arte Del lat. *ars*, *artis*, y este calco del gr. τέχνη *téchnē*.

1. m. o f. Capacidad, habilidad para hacer algo.
2. m. o f. Manifestación de la actividad humana mediante la cual se interpreta lo real o se plasma lo imaginado con recursos plásticos, lingüísticos o sonoros. (RAE y ASALE 2014 : 212)

語源の次に、語義が示され、1. が「技術、能力」の意味、2. が「芸

術」の意味に相当する。文法性については「m. o. f. (男性または女性)」と書かれているのみで、どのような場面でどう運用するのかはこれだけでは不明である。

次に、国内のスペイン語辞典で最大の紙幅を誇る『白水社スペイン語大辞典』を見てみよう。語義に関心がある訳ではないので、見出し横の文法性の表示を確認する。

arte [árte] [←ラテン語 ars, artis 「技能・職業」] 男/女 [單]では主に 男, 複では女, 単数冠詞: el, un[a]] ①芸術; 美術…

(山田ほか 2015: 206)

このように、文法性の表示はRAEの辞書同様「男/女」としているが、単数では主に男性名詞として、複数では女性名詞として使用される旨の補足がなされている。冠詞については、男性の単数名詞に対してであれば、当然 *el/un* を用いることになり、*arte* もこれに従う。一方で、この *arte* を女性名詞扱いしたとしても、語頭の母音 /a/ に強勢があるため、規範に従えば、定冠詞は *el* を用いる¹⁾。また、不定冠詞については *una* を用いるのが規範であるが、定冠詞 *el* からの類推が働いて男性形 *un* がスペイン語圏の地域・社会階層を問わず幅広く使用されるため、*un* の使用も認められている。したがって、後述するように、冠詞のみからでは名詞 *arte* の文法性を判別することができず、名詞の性に合わせて屈折を変化させる形容詞の形態によらなければならない。

3. ラテン語 *ars* と他のロマンス諸語における *arte* 相当語の文法性

本節では、スペイン語を含むロマンス諸語の母体となったラテン語（正確には口語ラテン語）における *ars* の性と、スペイン語以外のロマンス語において、この *ars* 由来の「技術・芸術」を意味する名詞の文法性がどのようなになっているかを概観する。


ラテン語における文法性は、男性、女性、中性の3つであったが、それらは多くのロマンス諸語において男性と女性の二性に集約される結果となった。男性名詞と女性名詞の大部分はその性を引き継いだ²⁾が、性を転換したものも少なくない²⁾。また、中性の名詞は多くが男性名詞に、一部が女性名詞へと性を転換した³⁾。そして、スペイン語の名詞 *arte* の元となったラテン語の *ars* は女性名詞であった。この名詞がラテン語において女性名詞であったということは、辞書の記述により周知であるが、この語そのものを眺めていても言語学的には性の判断はつかない。これはスペイン語にしても同様であるが、名詞の文法性を確認するためには、この名詞を修飾する形容詞の屈折によらなければならない。ラテン語 *ars* は、たとえば、以下のような書籍の題目によって女性名詞であることが知れる。

*Ars amatoria*⁴⁾ (オウィディウス『恋の技法』)

*Ars grammatica*⁵⁾ (ドナトゥス『文法』)

下線部 *amatoria* と *grammatica* の両語は、それぞれ *amatorius*、*grammaticus* という形容詞の主格女性単数形であり、ラテン語において形容詞は修飾する名詞の性、数、格に合わせて形態を一致させる必要があるため、これにより *ars* が女性名詞だと分かる。

さて、スペイン語以外のロマンス諸語における *arte* 相当語の文法性はどうであろうか。ラテン語 *ars* に由来するロマンス諸語の名詞は、イタリア語とポルトガル語の⁶⁾ *arte*、ルーマニア語 *artă* がいずれも女性名詞、フランス語の *art* は男性名詞である。また、フランス語と同綴りのカタルーニャ語 *art* はスペイン語同様、単数で男性名詞として複数で女性名詞としてふるまう。以下に、各言語の辞書から用例を引き、見ておこう。

[イタリア語] *arte* 〔〕 *arte sacra* 宗教芸術、*arti figurative* 造形〔具象〕芸術
(池田ほか編 1999 : 120)

[ポルトガル語] *arte* 〔〕 芸術、美術；造形美術 [*artes plásticas*]

(池上ほか 2005 : 138)

[ルーマニア語] artă *f* 〈-te〉 arte *m/f* (Herder 2011 : 68)[フランス語] art /ar/ *n. m.* art nouveau アールヌーヴォー

(田村ほか 2005 : 125)

[カタルーニャ語] art (ar (t)) *m.f.* art, *belles* ~s, fine arts

(Routledge 1994 : 20)

ここに挙げた5つの言語のうち、はじめの3言語はラテン語からの性を維持しているが、残りの2言語においては、ラテン語から現代の各ロマンス語に至るまでの間に、文法性の転換点があったということになろう。ところで、2節で述べたとおり、文法範疇としての名詞の性を有する言語において、名詞の形態そのものから性の判別が付くことはない。スペイン語の場合、語末が-oであれば男性名詞、-aであれば女性名詞、-dad や -ción であれば女性名詞などの傾向や原則はあるものの、それで全ての名詞の性を完全に予測することはできない。したがって、ある名詞が男性名詞と女性名詞のどちらとして用いられているかを特定するには、ラテン語同様、この名詞の指示対象の外延を限定する限定詞や、内包を記述する形容詞との形態上の一致による必要がある。現代スペイン語の定冠詞と形容詞 (*culinario* という語を例にとる) で *arte* を修飾する際、統語上可能な組み合わせは次のようになる。

表 1 *arte* の性と形容詞の組み合わせ

arte の文法性	単 数		複 数
男性名詞として	el arte culinario		los artes culinarios
女性名詞として	el arte culinaria	la arte culinaria	las artes culinarias

なお、ここで女性単数に二つの形式があるのは、前節で述べたように、強勢のある /a/ で始まる女性名詞には定冠詞として *el* を付すという規範があるからである。男性名詞に冠する定冠詞 *el* と女性名詞に冠する *el* は歴史的には別物であったが、音韻変化を経て同形となり、時には母語話者さ

えも混乱することがある。この表に示した形式をふまえ、RAE のコーパスにおいて、*arte* に形容詞が付されている例を探し、それが男性形と女性形のどちらになっているかを確認することで、*arte* の文法性を判断する。

4. 現代スペイン語コーパスにおける *arte* の文法性

まず、RAE が提供している現代スペイン語参照コーパス CREA (Corpus de referencia del español actual⁷⁾) を用いて、現代スペイン語における *arte* の使用実態を調査した。今回の調査における検索条件は、地域はスペイン限定、媒体は書籍のみ、作家とジャンルは「指定なし」としたが、年代は得られるデータの件数を絞るために、必要な時には年代を区切って検索した。先の表で示したように、複数形よりも単数形のほうが、文法性の顯示がやや複雑であるので、単純な複数形のほうから調査を行った。

4.1 【現代】複数形 *artes* の文法性

複数形では、定冠詞のみで性別の判断が可能であるので、'los artes' および 'las artes' という語列で検索を行った。その結果、上述の条件下で、'los artes' は 2 種類の文書中に 5 例出現したが、'las artes' は 184 種類の文書中に 665 例出現し、言葉を尽くさずとも、複数形 *artes* は圧倒的に女性名詞として使われるということが理解されよう。ここでは以下に、共時的な観点から興味深い 'los artes' の例を 2 例挙げておこう。

- (1) ... la apoteosis de la Escuela Española tuvo lugar en la época de los impresionistas y del arte europeo del fin de siglo XIX, convirtiéndose el arte español, [...] en uno de los artes históricos nacionales más apreciados internacionalmente.
- (2) ... es predominante la consagración de los artes a la religión cristiana: ocurre lo mismo en el norte de África hasta la conquista musulmana, y...

(Calvo Serraller, Francisco, *Historia del Arte*, Santillana, Madrid, 1997)

(1)と(2)は同一の著者によるもので、単一の著作内で見つかる例である。なお、(1)においては、該当箇所に至るまでに、⁸⁾[d] *el arte europeo* と *el arte español* のように単数形で男性名詞として用いられている *arte* の例も含まれている。繰り返しになるが、これが男性であることは、後続する形容詞の *europeo* (女性であれば *europea*) と *español* (女性であれば *española*) という形態によって知られる。規範からは外れるものの、この著者の場合は、単複を問わず *arte* は男性名詞として用いるということを内面化していると言えよう。

この(1)や(2)のような用例は興味深いが、現代スペイン語における複数形 *artes* は、今回の資料で言えば、全用例における 99.2% (665/(665+5)) が女性名詞として扱われており、この事実は規範および多くの著述の記述に合致している。次節では、現代における単数形 *arte* の文法性を検討する。

4.2 【現代】単数形 *arte* の文法性

本節では、現代スペイン語における単数形 *arte* の文法性について、前節同様コーパスを用いて検証しよう。

国家による教育制度が整い、RAE や多くの出版社が文法書や辞書、スタイルブック (慣用辞典) を刊行する現代においては、この *arte* のように、ある特定の名詞の文法性に限らず、言語のあらゆる領域に関する規範が行き渡っていると考えられるため、固定化した慣用表現を除き単数形 *arte* を女性名詞扱いする用例は極めて希少であろうと推測できる。これを以下で実証する。

4.2.1 《定冠詞 *la* + *arte*》

arte という語を女性名詞扱いするとき、これに定冠詞を付すならば、すでに述べたように、男性単数形と同形の *el* を施さなければならない。「強

勢のある /a/ で始まる女性名詞⁹⁾」となるからである。しかし、ここではあえて、‘la arte’のように定冠詞として *la* を冠した語列で検索をし、その実例を検討する。‘la arte’という言い方は、規範に即せば誤った言い方ではあるが、定冠詞 *la* の形態から、明らかに *arte* が女性名詞扱いされていると判断可能である。さて、検索の結果、それぞれ別の著者による4種類の文書中に計5回の使用例が見つかったが、これらはいずれも現代の文章中に15～16世紀の文章を引用しているものであった。この中から、1569年に Antonio de Aguilera なる人物が書いたとされる以下の例が、名詞 *arte* の文法性の揺れを例証していると思われるので確認しておく。

- (3) “... se pueda haber adquirido la prudencia y ciencia necesaria que para usar esta dicha arte se requiere, pues arte y oficio de letras y que no poca dificultad contienen para verse de entender según conviene y la arte lo requiere [...] que tendrá necesidad de haber ejercitado y practicado este arte con personas doctas y expertas.”
(Sagrario Muñoz Calvo, *Historia de la farmacia en la España moderna y contemporánea*, Síntesis, Madrid, 1994)

(3)の短いパラグラフ中に *arte* が4回登場しており、このうち3つが限定詞ないし形容詞を伴っている。これに下線を付す。下線の2つ目が調査対象の *la arte* である。最初の *esta dicha arte* では、指示詞 *esta* および形容詞 *dicha* がいずれも女性形であるので、*arte* が女性名詞扱いされているということが分かる一方で、3つ目の *este arte* では指示詞が *este* という男性形になっており、*arte* は男性名詞としての扱いを受けている。一人の著者が書いた短い段落の中でさえ、このような揺れが見られる。

このように、‘la arte’という語列は現代スペイン語の文章中においては見つからず、それは現代の規範から言えば当然ではあるものの、副次的な結果として、15～16世紀の文章においては散見されるということが示さ

れた。次節では定冠詞を *el* とし、後続の形容詞の屈折から *arte* の文法性を判断し、その運用実態を調査する。

4.2.2 《定冠詞 *el* + *arte*》

次に、定冠詞として *el* を冠した '*el arte*' という語列を検索し、その結果を分析する。CREA においてこれまでと同じ条件でこの語列を検索すると、334 種類の文書中に 2047 例を得たが、CREA は検索条件に見合う結果が 1000 件を超えると、その実例を表示することができない。そこで、1975 年から 1993 年までの検索で得られた 939 例に加え、1994 年から 1995 年までの検索で得られた 176 例の中から残り 61 例を検討し、合計 1000 例において '*el arte*' が男性名詞として使われているのか、あるいは女性名詞として使われているのかを確認することにした。2 節で確認したように、'*el arte*' という語句のみではこの名詞の文法性を判別することができないため、この語列に形容詞句が付加されている例を採取した。なお、ここでいう形容詞には過去分詞¹⁰⁾も含まれる。スペイン語において、限定する名詞の性と数に合わせて形容詞の屈折が変化するのは、「主語句 + 繫辞動詞 + 形容詞句¹¹⁾」や分詞構文である「過去分詞 + (意味上の主語)」のように、いくつかの統語パターンが考えられるが、今回は調査の単純化のため、《*el arte* + [副詞] + 形容詞》という構造になっているもののみを採取した。その結果、1000 例のうち '*el arte*' に形容詞が後続していたのは 251 例で、この調査で得られた形容詞のうち、出現回数が 2 回以上のものを以下の表に示す。なお、頻度が 4 以上の語については、各数字が頻度を表す。もちろん、この中には *anterior* や *oriental* のように、形態上男性と女性の区別が不可能なものも含まれているが、語尾が -o で終わっている形容詞に関してはすべて -o になっていることがわかる。この 251 例のうち、42 例はこの *anterior* や *oriental* のように形態上男性と女性の区別がつかないものである。文法性の判別が可能な残り 209 例の中で、形態上女性形であると判別可能であったのは、1 例のみ該当した *suasoria* という語であった。*el arte*

表2 CREAにおいて《el arte+ [副詞]+形容詞》で採取した形容詞 [頻度順]

語末が -o/a							語末が -o/a 以外	
頻度 4 以上	moderno 20	contemporáneo 8		religioso 8		paleocristiano 6	español 6	
	prehistórico 6	abstracto 5	chino 4	clásico 4	egipcio 4	negro 4		
頻度 3	bizantino	cristiano	gótico	negroafricano	supremo		anterior	
	carolingio	culinario	italiano	romano				
頻度 2	bárbaro	enajenado	fotográfico	pictórico	representativo	creador	parietal	
	barroco	escénico	mismo	plástico	velazqueño	occidental	popular	
	comprometido	europeo	nuevo	preferido		oriental		

suasoria は「説得の技術」を意味する。この調査で明らかのように、現代スペイン語において *arte* という語を女性名詞として用いるのは、きわめて限られた場面においてであるということが言えよう。これを裏付ける言説として、Moreno de Alba¹²⁾ (2003) を以下に引き、筆者による日本語訳をその下に付す。

Por mi parte creo que, al menos en el español contemporáneo, *arte*, empleado en singular, es casi siempre masculino. Se emplea en femenino sólo con ciertos adjetivos, con los que forma una especie de sintagmas fijos: *arte poética*, *arte plumaria* o, mucho más raro, *arte tormentaria*, por ejemplo. No recuerdo haber oído o haber visto escrito, por ejemplo, **el arte bella* o **la bella arte* (ejemplo del DRAE). Es decir que, fuera de algunos pocos sintagmas fijos, el adjetivo que acompaña al sustantivo singular *arte* va en masculino: *arte angélico*, *figurativo*, *abstracto*. . .

(Moreno de Alba: 2003)

私としては、少なくとも現代スペイン語において、単数で用いられる名詞 *arte* はほとんど常に男性であると思う。女性として使用されるのはいくつかの形容詞を伴うときのみであり、その形容詞とセットである種の固定化した名詞句を作るのである。たとえば、*arte poética* (詩の技法)

や *arte plumaria* (鳥の羽を使った芸術品) がそうであるし、より珍しいものとしては *arte tormentaria* (兵器製造術) という表現が挙げられよう。アカデミアの辞書 DRAE の例であるが、**el arte bella* や **la bella arte* というのを聴いた記憶もなければ、書かれているのを目にしたこともない (*bella* は *bello* という形容詞の女性単数形)。つまり、いくつかの定型化した名詞句を除けば、単数の *arte* にかかる形容詞は、*arte angélico*, *figurativo*, *abstracto* などのように男性形となる。

Moreno de Alba が挙げていた例の中では、*arte poética* と *arte tormentaria* という名詞句が固定化した表現と考えられる。アカデミアの辞書 (RAE y ASALE 2014) がこれを ‘*arte*’ の下位項目としてそのまま立項しているからである。

～ *poética* f. *poética*

～ *tormentaria* f. desus. *artillería* (*arte de construir armas de guerra*)

(RAE y ASALE 2014 : 212)

以上のように、現代スペイン語においては、少数の例外を除けば、単数で用いられる *arte* は男性名詞として用いられており、多くの辞書や文法書における記述は正しいと言える。次節では、本稿の主たるテーマである *arte* の文法性が時代を通じてどのように扱われてきたかについて、通時コーパスから得られる例をもとに検討していく。

5. スペイン語通時コーパスにおける *arte* の文法性

本節では、RAE の CORDE (*Corpus diacrónico del español* スペイン語通時コーパス¹³⁾) を用いて、*arte* が歴史的に男性名詞・女性名詞のどちらとして扱われてきたのかを、実例の分析を通して検討する。だが、その前に RAE が初めて編纂し、1726 年に世に出た *Diccionario de Autoridades* (『模範辞典』) で、*arte* の項を見てみることにしよう。

ARTE. s. f. La facultád que prescribe reglas y preceptos para hacer rectamente las cosas. Debaxo de este nombre se entiende la generalidad de las artes liberáles y mecánicas. En algunas de las acepciones de este nombre se usa siempre como masculino: como la que corresponde à gentileza ò gallardía de la Persóna: y en las demás se le aplica muchas veces el artículo masculino, por evitar la cacophonía.

(RAE 1726)

この名詞の文法性は、項の最初に s.f. (sustantivo femenino) とあるように、女性とされている。しかしながら、2行目の後方から、「人の上品さやりりしい振る舞いを意味するときは男性名詞として用いられ、また嫌音調を避けるために男性の冠詞を多く使う」とあり、冒頭で示されたこの語の性と矛盾することに頓着していないようにも見える。さて、この『模範辞典』の語釈の中でも言及されている冠詞について、通時的にどのような形態が使われてきたのかを、以下の寺崎（2011）で確認しておく。

女性単数形 *la* は *ille* の女性単数対格に由来する：*illa* (m) > LV. *ela* > *ela/la/el/ell* > *la/el* (+ 母音) > *la/el* (+ a-)。女性単数には男性単数形と同形の *el*, *ell* が存在する。これは、*el* (l) a の語末音消失により生じたもので、中世スペイン語の初期にはあらゆる母音の前で用いられ、*la* との使い分けも厳格ではなかった：*la/el/ell espada* (EMd. *la espada* 「剣」)。

(寺崎 2011 : 148)

ここに示されているとおり、母音で始まる名詞の前では、*ela*、*la*、*el*、*ell* といった形が定冠詞の異形態として用いられていた。「水」を意味する女性名詞 *agua* の前では *ela* から *el* となり、現代でも *el agua* となる一方で、/a/ 以外の母音で始まる女性名詞（例えば *edad*）の前位置では、その他の女性名詞同様、*la edad* のように *la* が用いられることとなった。したがって、通時コーパスにおいては、現代では用いられないこれらの定冠詞の異形態

も考慮に入れて検索する必要がある。次節では、先の現代語の調査と同様、文法性の顕示が単純な複数形の用例からまず採取し、調べることにする。なお、検索条件も先と同様であるが、年代は得られるデータの件数を絞る目的で、必要な時には年代を区切って検索することとした。

5.1 【通時】複数形 *artes* の文法性

定冠詞のみで文法性の判別が可能となる複数形では、定冠詞 *las* を冠した '*las artes*' と、*los* を冠した '*los artes*' の文字列で検索を行うことにする。また、複数形の調査は本稿の主たる目的ではないので、*las* と *los* の異形態については考慮の埒外とした。さて、この検索の結果として得られた用例は、'*las artes*' が 929 種類の文書中に 3267 例、'*los artes*' が 22 種類の文書中に 28 例で、全用例中の 99.1% が '*las artes*' であり、'*los artes*' は 1% にも満たず、その差は歴然である。ここでは、その数少ない *los artes* の例のうち、最も古い 13 世紀のものと最も新しい 20 世紀のものを一つずつ以下に示すにとどめる。

- (4) ... carlos el noble que fue muy estudioso & sopo muy bien los artes liberales (Anónimo, *Castigos. BNM ms. 6559*, 1293)
- (5) Aplacar las aguas, ..., espantar de cualquier otro modo los peces, ya par (sic.) obligarles á huir en dirección de los artes propios, ya para que ...
(Anónimo, *Ley [Leyes, reales decretos, reglamentos y circulares de más frecuente aplicación en los tribunales ...]*, 1907)

このように、複数形の *artes* に関しては、99% 以上が女性名詞として現れ、ラテン語由来の元来の名詞の性が保たれているということが分かる。

5.2 単数形 *arte* の文法性

この 5.2 節において、本稿の主たる目的である、単数形 *arte* の文法性の

通時的調査を試みる。調査方法は、コーパスから《定冠詞 + arte + [副詞] + 形容詞》となっている例のみを採取し、*arte* に後続する形容詞の形態から判断する。しかし、先に示したとおり、通時的に定冠詞にはいくつかの異形態が存在したため、この調査では、その異形態を考慮に入れ、定冠詞の形態ごとに分類して結果を示すことにする。名詞の *arte* と共に今回調査した定冠詞の異形態は、*ell*、*la*、*el* の三つであり、*ell* は現代では用いられない綴りである。また、フランス語でエリズィオン（母音消失）と呼ばれる、定冠詞が名詞と結合し表記上もつなげて綴られる形式（*le+art* → *l'art*）は、過去にはスペイン語にも存在したが、CORDE においては《*el'arte*》は 1 例のみ、《*l'arte*》は 2 例しか用例がなく、今回は無視した。¹⁴⁾

5.2.1 《定冠詞 *ell* + *arte*》

まずは定冠詞の形態を *ell* として '*ell arte*' という語連続を検索の対象とした。結果として、10 種類の文書中に 34 例が得られ、このうち《*ell arte* + [副詞] + 形容詞》となっている例は 7 例あり、得られた形容詞は *española* が 1 例、*mágica* が 6 例であった。それぞれ 1 例ずつ下に示す。

- (6) ... es mago el qui sabe ell arte magica.

(Alfonso X, *General Estoria*. Segunda parte, c 1275)

- (7) Cancionero general de obras nuevas nunca hasta ahora impresas,
assi por ell arte española como por la toscana...

(Antonio Rodríguez Moñino, *Discurso de recepción ante la Real Academia Española: Poesía y Cancioneros (siglo XVI)*, 1968)

(7) の例の出典は Antonio Rodríguez Moñino による 1968 年の著作だが、この著作内に引用されている 1554 年にスペインのサラゴサで出版されたある歌集のタイトルが (7) である。この (6) と (7) に現れる形容詞は共に女性形である。*mágica* は現代でも定型的に女性形で現れやすい形容詞では

あるが、この7例の中に《ell arte + 形容詞の男性形》となる例はなく、*arte* が女性名詞として用いられていることが確認できる。

5.2.2 《定冠詞 *la* + *arte*》

次に、定冠詞の形態を現代の女性単数形と同じ *la* として、‘*la arte*’ という語連続を検索の対象とした。前節の ‘*ell arte*’ と比べてヒット数が多いため、CORDE に含まれている資料のうち、最も古い例が得られる 1200 年台の後半から 250 年ずつを一区切りとして、次のように年代を区切って検索を行った。その結果、1250 年から 1500 年までに区切った検索では 84 種類の文書中に 301 例、1501 年から 1750 年までにおいては 115 種類の文書中に 346 例、そして、1751 年から 1974 年まででは 15 種類の文書中に 23 例が得られた。ここで得られた例のうち、《*la arte* + [副詞] + 形容詞》となっている例は全体で 125 例であったが、そのうち 19 例は形態上で性別の判断ができず、残りの 106 例は全て女性形であった。以下に、この調査で採取した形容詞のうち、2 回以上現れたものを示す。なお、数字は出現回数を表す。

表 3 《*la arte* + [副詞] + 形容詞》で採取した形容詞

語末が -o/a	mágica 33	notoria 10	poética 6	obstetricia 3	toda 3
	cabalística 2	divina 2	humana 2	impresoria 2	llamada 2
	luliana 2	médica 2	música 2	nueua(nueva)2	separatoria 2
語末が -o/a 以外	militar 8	mayor 4			

ここに挙げた形容詞のうち、*militar* や *mayor* は形態の上から性別の判断がつかないが、それ以外の形容詞は全て女性形となっているので、名詞 *arte* を女性名詞として扱っていることが分かる。1 度しか現れなかったため上の表には含まれていないが、*marítima*（海の、海洋の）の例を下で確認しよう。

- (8) ...e avía navegado otras vezes por aquella mar e sabía mucho de

la arte marítima, ...

(Enrique de Villena, *Traducción y glosas de la Eneida. Libros I-III*,
1427-1428)

先の《定冠詞 *ell* + *arte*》同様、《*la arte* + 形容詞の男性形》となる例は得られなかった。定冠詞として *la* を選んでいる時点で、*arte* を女性名詞扱いしているのはほぼ明白であり、これを限定する形容詞も女性形となるのが論理的である。特筆すべきは、この《*la* + *arte*》という語列そのものが、1751 年以降の資料では極端に少ないことである。この理由の一つとして、18 世紀は、RAE の設立 (1713 年)、『カスティーリャ語正書法』(1741 年)、『カスティーリャ語文法』(1771 年) の出版など、スペイン語の規範が打ち立てられ始め、そして浸透していった時代であり、単数 *arte* に関して言えば、男性名詞扱いすることが徹底されてきたということが言えよう。

5.2.3 《定冠詞 *el* + *arte*》

最後に、定冠詞の形態を *el* として ‘*el arte*’ という語連続で検索を行った。すでに述べたように、*arte* という名詞の場合、これを男性名詞として扱えば当然定冠詞は *el* という形態になるが、これを女性名詞として扱ったとしても、語頭の /a/ に強勢があるため、定冠詞として *el* が出現する可能性がある。語頭の /a/ に強勢がある女性名詞の単数形においては、それが現代の規範である。さて、この ‘*el arte*’ は現代の運用につながる語連続であるので、非常に多くの例が得られる。1250 年から 1500 年までは 114 種類の文書中に 337 例が得られ、1501 年から 1750 年までは 538 種類の文書の中で 2270 例が得られた。また、最後の 1751 年から 1916 年¹⁵⁾ まででは 502 種類の文書中に 2754 例が得られた。なお、1974 年までとすると、737 種類の文書中に 4500 例という数字が出てくる。以下、年代ごとに調査結果を見ていく。

5.2.3.1 1250 年から 1500 年までにおける ‘el arte’

この年代では 114 種類の文書中に 337 例の ‘el arte’ が現れたが、このうち《el arte + [副詞] + 形容詞》となっていた例は 47 例であった。さらに、このうち 15 例は形容詞の形態上で文法上の性の判断が不可能であって、残り 32 例のうち、31 例が女性形で、1 例のみ男性形であった。この唯一の例を以下に示す。

- (9) ... aquello que ayer en tanto grado loaste. engañando por mostrar
el arte tuyo luxurioso con letras falsas en chico espacio rreuocaste
 ... (Diego de Valera, *Tratado en defensa de virtuossas mujeres*. BNM.
ms. 1341, a 1445)

この(9)においては、*tuyo* と *luxurioso* という二つの形容詞が連続しているが、どちらも男性単数形となっている。しかし、この(9)以外の形容詞は全て女性形であったことから、少なくとも《el arte + [副詞] + 形容詞》という語列に関し、この年代においては、ラテン語 *ars* が元来有していた女性の文法性を引き継いでいたということが言えよう。

5.2.3.2 1501 年から 1750 年までにおける ‘el arte’

1501 年から 1750 年までにおいては、538 種類の文書中に 2270 例の ‘el arte’ が現れたが、CORDE では、検索条件に適合する用例が 1000 件以上現れると、その用例を閲覧することができなくなるため、この 2270 という数字を 1000 より小さい数にすべく、50 年ないし 100 年前後の単位でさらに細かく年代を区切って調査することにした。1501 年から 1598 年、1599 年から 1700 年、1701 年から 1750 年という区分である。以下、これを順に検討する。

5.2.3.2.1 1501 年から 1598 年まで

Elio Antonio de Nebrija (1444?-1522) が *Gramática de la lengua caste-*

llana (『カスティーリャ語文法』) をカスティーリャ王国女王イサベルに献呈したのが 1492 年であり、その 10 年後が 1501 年である。この 1501 年からほぼ 100 年後の 1598 年までを検索の対象とすると、243 種類の文書中に 971 回 ‘el arte’ が出現した。この 971 例のうち《el arte + [副詞] + 形容詞》となっている例は 150 例であったが、そのうち 87 例は形態上で性別の判断ができず、残りの 39 例が女性形、24 例が男性形であった。以下に、この期間で得られた男性形の形容詞全てと、これに対立する女性形の例を示す。なお、数字は出現回数である。

表 4 1501 年から 1598 年までの期間で採取した男性形の形容詞と対立する女性形

bélico 1 bélica 1	divino 1	humano 1 humana 1	inventado 1	militario 1	profesado 1	suyo 1
bellísimo 1	engañoso 1	imitador 1	mágico 3 mágica 16	nuevo 1	separatorio 1 separatoria 3	
dicho 1 dicha 2	eslavón 1	ingenioso 1	matemático 1 matemática 1	perezoso 1	sob(v)erano 2	

ここでは、得られた形容詞の例のうち、他の形容詞と共に起している *engañoso* の例を見ることにしよう。

- (10) ... parece que concuerda con lo que dice Plinio [...], confesando que, bien que sea el arte más fraudulente o engañoso de todos, ha habido grandísima reputación (Gonzalo Fernández de Oviedo, *Historia general y natural de las Indias*, 1535-1557)

engañoso の前に来ている *fraudulente* も同じく形容詞であるが、語尾が -e であるためこの語単独では文法性が判別できない。しかし、*engañoso* の語尾 -o によって *arte* が男性名詞扱いされているということが分かる。この《el arte + [副詞] + 形容詞》という語列に関して言えば、1250 年からの 250 年間と比べ、この期間だけでも、*arte* が男性名詞扱いされる比率は高まり、全体の約 38% (24/(39+24)) になることが示された。

5.2.3.2.2 1599 年から 1700 年まで

次に、1599 年からほぼ 100 年後となる 1700 年までを対象に調査した。その結果、255 種類の文書中に 882 例の ‘el arte’ が得られた。この 882 例のうち《el arte + [副詞] + 形容詞》となっている例は 101 例あったが、そのうち 50 例は形容詞の形態上文法性の判断が不可能であった。そして、残りの 51 例のうち、26 例が女性形の形容詞、24 例が男性形の形容詞を伴っており、ほぼ半々という結果になった。以下に、先と同様、この期間で得られた男性形の形容詞全てと、これに対立する女性形の例を示す。

表 5 1599 年から 1700 年までの期間で採取した男性形の形容詞と対立する女性形

animado 1	ciego 1	cómico 3	difícultoso 2	humano 1	largo 2 larga 1	náutico 3 náutica 2	riguroso 1
antiguo 1	claro 1	diestro 1	divino 1 divina 1	inventado 1	maravilloso 1	poético 2 poética 5	

得られた男性形の形容詞の例のうち、ここでは *ciego* の例を見ることにする。

- (11) Presume con el arte horrible y ciego dismantelar el cristalino muro, desengarzando, del ardiente gonce, la cadena inmortal de esferas once.

(Antonio Enríquez Gómez, Sansón Nazareno, c 1649–1656)

前節で見た形容詞 *fraudulente* と同じように、(11)に現れる *horrible* という形容詞単独では文法性の標示が不可能であるが、後続の *ciego* によって可能であるので、男性形の形容詞として数えている。以上、この 1599 年から 1700 年までのほぼ 100 年の間では、女性形 26 例、男性形 24 例で、少なくとも《el arte + [副詞] + 形容詞》という語列において、名詞 *arte* が男性名詞扱いされている比率は約 50% となった。

5.2.3.2.3 1701 年から 1750 年まで

次に、先述のとおり、スペイン語の規範樹立の時期と重なる 18 世紀の

最初の 50 年間を対象にして、‘el arte’ の用例を探した。その結果、40 種類の文書中に 370 例を得た。この 370 例のうち、《el arte + [副詞] + 形容詞》となっている例は 32 例と少数であったが、そのうち 8 例は形容詞の形態上文法性の判断が不可能であった。残りの 24 例のうち、7 例が女性形の形容詞、17 例が男性形の形容詞を伴っていたので、全用例のうち女性形が 29.1%、男性形が 70.8% となる。以下に、この期間で得られた全ての男性形の形容詞と、これに対立する女性形の例を示す。

表 6 1701 年から 1750 年までの期間で採取した男性形の形容詞と対立する女性形

alquímico 2	mágico 1	obstetricio 1	práctico 1
dulce 1	médico 3 médica 1	physiognómico 2	primero 1
humano 2	mímico 1	poético 1	transmutatorio 1

このように、370 例から 32 例しか採取できず、得られた用例の実数は少ないが、少なくとも《el arte + [副詞] + 形容詞》という語列において、比率としてはこの期間で男性形の使用が女性形に対して優勢となった。

さて、これまでに細分化して確認した 1501 年から 1750 年までのデータを整理する。この期間に《el arte + [副詞] + 形容詞》という語列で現れた例のうち、形容詞の性が判別できた例の数は以下のとおりであった。これを (12) として示す。ただし、数字は女性形の実数：男性形の実数、括弧内の数字は全用例中における男性形の比率である。

(12)

期間 A	期間 B	期間 C	合計
1501～1598 年	1599～1700 年	1701～1750 年	1501～1750 年
39 : 24 (38%)	26 : 24 (48%)	7 : 17 (70.8%)	72 : 65 (47.1%)

この年代全体での、語列《el arte + [副詞] + 形容詞》における男性形形容詞の使用の比率は 47.1% であったが、年代を細分化すれば、少しずつその使用比率が上がっていることが分かる。この年代において、元来ラテン語においては女性名詞であった *ars* (*arte*) が、単数形において男性名詞として使用され始め、その使用が広がりを見せたということが言えよう。

5.2.3.3 1751 年から 1916 年まで

最後に調査する年代は 1751 年から 1916 年であるが、調査対象となる年代が現代に近づくにつれ、得られる用例の数も膨大になるため、ここでもやはり、いくつかの期間に細分化し、実際の用例を見ていく。

5.2.3.3.1 1751 年から 1861 年まで

1751 年以降を検索の対象として、得られる用例が 1000 例を超えない範囲が 1861 年までである。この期間では 236 種類の文書中に 903 例の ‘el arte’ がある。この 903 例のうち、《el arte + [副詞] + 形容詞》の語列になっている例は 1 割にも満たない 98 例で、そのうち 23 例は形容詞の形態上文法性の判断が不可能であった。そして、残りの 75 例のうち、28 例が女性形の形容詞、47 例が男性形の形容詞であったので、全用例のうち女性形は 37.3%、男性形は 62.6% である。以下に、この期間で得られた全ての男性形の形容詞と、これに対立する女性形の例を示す。

表 7 1751 年から 1861 年までの期間で採取した男性形の形容詞と対立する女性形

agronómico 1	divino 2	funesto 1	infinito 1	místico 1	tipográfico 2
arábigo 1	dramática 4 dramático 2	filosófico 1	lavateriano 1	muslímico 1	veneciano 1
benéfico 1	egipcio 1	gastrónomol	magnífico 1	profundo 1	visigodo 1
bizantino 1	elegiaco 1	gitano 1	mahometano 1	razonado 1	utilísimo 2
caligráfico 1	esclavizado 1	griego 2	maravilloso 1	revolucionario 1	
coreográfico 1	espléndido 1	heráldico 1	mecánica 1 mecánico 1	solicito 1	
difícilísimo 2	espantoso 1	hermoso 1	mismo 1	teológico 1	

先に示した(12)の期間 C と比べると、やや比率は下がるものの、この期間における男性形の形容詞の使用率は 60% を超え、女性形に対し優勢となったと言えるだろう。

5.2.3.3.2 1862 年から 1888 年まで

この期間を見てのとおり、わずか 26 年というスパンである。我々が利用している CORDE に限らず、通時言語コーパスが抱える共通の問題であると思われるが、年代ごとに資料体の量が異なるため、同じ条件でも得られる結果の単純数が大きく変化する。この‘el arte’という語列も、この年代に入り、これまでの検索よりもずっと短い 26 年という期間で、129 種類の文書中に 828 もの例が得られた。この 828 例のうち、《el arte + [副詞] + 形容詞》となっている例は 159 例あったが、そのうち 54 例は形容詞の形態上文法性の判別が不可能であった。残りの 105 例のうち、6 例が女性形の形容詞を、99 例が男性形の形容詞を伴っていたので、全用例のうち男性形は 94.2% となり、この年代において単数形 *arte* はほぼ完全に男性名詞化しているということが言えよう。ここでは下の(13)を見ておこう。

- (13) ... y ese mismo impersonalismo, y sobre todo el tecnicismo, la ciencia y el arte descriptivos tomados como objeto inmediato y único, ...
(Clarín, *Apolo en Pafos*, 1887)

この(13)における *la ciencia y el arte descriptivos* という語連続においては、形容詞 *descriptivos* が男性の複数形であり、先行する二つの名詞 *la ciencia* と *el arte* を修飾しているが、*el arte* を男性名詞として扱わなければこの形容詞が *descriptivos* という形態にはならないはずである。*el arte* がもし女性であるなら、形容詞は *descriptivas* という形態になろう。したがって、この *el arte* を男性の例として数えている。

5.2.3.3.3 1889 年から 1916 年まで

恣意的である点は否めないが、用例数を抑えるために、ここでも 27 年間というスパンで区切り、1889 年から 1916 年までのデータを検討する。この期間では、137 種類の文書中に 954 例の‘el arte’が得られた。この

954 例のうち《el arte + [副詞] + 形容詞》となっている例は 167 例あったが、そのうち 60 例は形容詞の形態上文法性の判断が不可能であった。残りの 107 例のうち、わずか 3 例が女性形の形容詞で、104 例が男性形の形容詞であるので、全用例のうち男性形は 97.1% である。19 世紀の終盤から 20 世紀の初頭に当たるこの年代において、単数形 *arte* はもはや完全に男性名詞となったということが言えよう。前節の (13) と同様、ここでも複数形の形容詞を伴う (14) の例を見ておく。

- (14) Los que estudian ... y ven desfilar ante sus ojos los nombres de tantos autores alemanes como han ilustrado la ciencia y el arte estéticos, ...
(Ángel Ganivet, *Granada la Bella*, 1896)

(13) と同様、(14) においても、*el arte* を男性名詞扱いしなければ、当該の形容詞が男性複数形とはなり得ないから、これらの例において *arte* の文法性は男性であると判断できる。この 1889 年から 1916 年までの間に得られた女性形の形容詞は 3 例のみで、*gráfica*、*histriónica*、そして、現代でも女性形が用いられる *cisoria* がそれぞれ一例ずつであった。

さて、1751 年から 1916 年までのデータを次の (15) としてまとめる。数字は女性形の実数：男性形の実数、括弧内の数字は全用例中における男性形の比率である。

(15)

期間 A	期間 B	期間 C	合計
1751～1861 年	1862～1888 年	1899～1916 年	1751～1916 年
28 : 47 (62.6%)	6 : 99 (94.2%)	3 : 104 (97.1%)	37 : 250 (87.1%)

(12) と比べても (15) 全体で大幅に男性形の形容詞が現れる比率は増えており、この年代においても、期間 A から B の間に急増し、B と C の間でも 100% に近づく形で漸増していると言える。

6. 結論

本稿では、スペイン語の名詞 *arte* の文法性について論じた。この名詞の単数形 *arte* は男性であるが、複数形 *artes* は女性である。スペイン語の *arte* という語の起源となるラテン語 *ars* は元来女性名詞であったが、スペイン語の歴史において、単数形のみが性を変更し男性名詞として扱われることとなった。これを調査するために、スペイン王立アカデミーが提供するコーパスを用い、《定冠詞 + *arte(s)*》および《*el arte* + [副詞] + 形容詞》という語列の用例を探し、定冠詞および形容詞の形態から *arte* が男性名詞として扱われているか、女性名詞として扱われているかという調査を行った。このようなことが可能であるのは、ロマンス諸語においては、形容詞はそれが修飾する名詞の文法性と数に合わせて屈折を変えるからである。さて、以下に、本稿の調査結果を今後の課題と共に整理し、本稿の結論とする。

- ・ラテン語の女性名詞 *ars* に由来するスペイン語の *arte* は、単数で男性名詞として、複数で女性名詞としてふるまうため、単数では、歴史上のどこかでこの語の性が転換したと考えられるが、これに相当する語を有する他のロマンス諸語の中でも、フランス語やカタルーニャ語では、歴史上その文法性を変えている。
- ・13世紀から20世紀後半までをカバーしているスペイン王立アカデミーの通時コーパス (CORDE) を用いて調査した結果、複数形 *artes* はほぼ女性名詞として用いられている。
- ・上記と同じ通時コーパスを用いて、先行する定冠詞別に、《定冠詞 + *arte* + [副詞] + 形容詞》という語列の用例を探し、*arte* の文法性を判断した結果、少なくともこの語列においては、
—‘*ell arte*’ が男性名詞扱いされている例はない。
—‘*la arte*’ は常に女性名詞扱いされている。
—‘*el arte*’ は以下の結果から、スペイン語の歴史を通じ、漸次的に男性

名詞化してきた。

調査した語列において男性形の形容詞が現れる比率を年代別に示すと以下のようになる。

1250～ 1500 年	1501～ 1598 年	1599～ 1700 年	1701～ 1750 年	1751～ 1861 年	1862～ 1888 年	1899～ 1916 年
3.1%	38%	48%	70.8%	62.6%	94.2%	97.1%

- ・課題として、今回使ったコーパスの仕様に、用例を得るために年代を恣意的に区切ったため、より精緻な調査が必要である。また、なぜ単数形のみが男性名詞として扱われることになったのかという点について、定冠詞として男性形と同形である *el* を用いること、*arte* がスペイン語の典型的な女性名詞に多い語尾である *-a* となっていないことを理由として挙げられようが、現段階では仮説の域を出ないため、これについては他の名詞についても同様の調査をし、比較検討しなくてはならないであろう。

注

- 1) 語頭の /a/ に強勢がある女性名詞には、*agua* (水)、*ave* (鳥)、*hacha* (斧)、*hada* (妖精) など多数あり、これらの名詞に対しては *el agua*、*el ave* のように、単数において男性形の冠詞を用いる。
- 2) たとえば17世紀の『ポール・ロワイヤル文法』はフランス語の名詞の性について、“D’autres fois aussi par vn pur caprice, & vn vsage sans raison, ce qui fait que cela varie selon les langues, & dans les mots même qu’une langue a empruntez d’une autre; comme *arbor* est du feminine en Latin, & *arbre* du masculine en François; *dens* masculin en Latin, & *dent* feminin en François.” (Arnauld et Lancelot 1676 : 40) と述べ、フランス語がラテン語から受け継いだいくつかの名詞について、文法性が変化したことにふれている。なお、引用文中において、語頭の *u* は *v* で綴られ、「フランス語」を意味する *François* は当時の正書法で *François* と綴られている。
- 3) たとえば中性名詞であった *opus* (仕事・作品) は、その複数主格・対格形が *opera* であったが、これが音韻変化を遂げてスペイン語の女性名詞 *obra* になった。他の語からの類推で語末の /a/ が女性を表す形態素として認識され

たためである。

- 4) プブリウス・オウィディウス・ナーソー（紀元前 43 年～紀元後 17 ないし 18 年）による。岩波文庫では『恋愛指南』という題名になっている。
- 5) アエリウス・ドナトゥス（4 世紀中ごろ）による、後世に多大な影響を与えた文法書。
- 6) 綴りが同じというだけであって、発音は当然異なる。
- 7) CREA は、1975 年から 2004 年までの小説や新聞、雑誌、研究書、テレビやラジオ放送を文字に起こしたものをコーパス化したもので、ジャンルや年代、国、作家の名前を指定して検索することが可能である。その一方で、含まれているテキストに品詞のタグは付いておらず、「arte+ 任意の形容詞」のような検索はできない。
- 8) *del* という形式は前置詞 *de* と男性単数定冠詞の *el* が融合した形態である。
- 9) *arte* 以外の語については、註 1 を参照。
- 10) スペイン語の分詞には過去分詞と現在分詞とがあるが、過去分詞は名詞を限定でき、通常の形容詞同様、名詞の性と数に合わせ屈折が変化する。一方、現在分詞は副詞的な機能を持ち、屈折が変化することはなく、英語の *a barking dog* のような例とは異なり、規範的には名詞を限定することはできない。
- 11) ドイツ語においても、ロマンス諸語同様、形容詞が名詞の性と数に合わせて屈折を変化させるが、繫辞動詞を挟んで主語句を修飾する場合は無変化である（*Der Mann ist jung. / Das Mädchen ist jung.*）。
- 12) Moreno de Alba (1940–2013) はメキシコ人のスペイン語学者。
- 13) 12 世紀ごろから 1974 年までの小説や新聞、雑誌、研究書、テレビやラジオ放送を文字に起こしたものを含むコーパスで、全体の規模は 2 億 5000 万語以上である。機能と制限については、CREA と同様である。
- 14) 得られた例はアポストロフィのない '*elarte*' や '*larte*' という形式であったが、これと同じ綴りの他の語（同綴異義語）という可能性はない。
- 15) CORDE には 1200 年代から 1974 年までのデータが収録されているが、20 世紀以降は用例があまりに多いので、今回の調査では 1916 年までとした。

参考文献

- Arnauld, Antoine et Claude Lancelot (1676) *Grammaire générale et raisonnée ou La Grammaire de Port-Royal*, Edition critique présentée par Herbert E. Brekle, Friedrich Frommann Verlag, Stuttgart-Bad Cannstatt.
- Moreno de Alba, José G. (2003) “el arte / las artes”, *Suma de Minucias del lenguaje*, Academia mexicana de la lengua.

(<https://www.fondodeculturaeconomica.com/obra/suma/r3/buscar.asp>)

寺崎英樹 (2011) 『スペイン語史』 大学書林、東京。

コーパス・辞書

Herder Diccionarios Pocket Român-Spaniol / Español-Rumano, 2011, Herder, Barcelona.

池田廉編 (1999) 『伊和中辞典〈第2版〉』 小学館、東京。

池上岑夫他編 (2005) 『現代ポルトガル語辞典 (改訂版)』 白水社、東京。

RAE y ASALE (2014) *Diccionario de la lengua española 23ª edición*, Espasa, Madrid.

Real Academia Española: Banco de datos (CORDE) [en línea] *Corpus diacrónico del español*. <<http://www.rae.es>> スペイン語通時コーパス [2019年3月21日最終アクセス]

Real Academia Española: Banco de datos (CREA) [en línea] *Corpus de referencia del español actual*. <<http://www.rae.es>> 現代スペイン語参照コーパス [2019年3月15日最終アクセス]

Real Academia Española, *Diccionario de Autoridades*, 1726-1739 <<http://web.frl.es/DA.html>> [2019年3月19日最終アクセス]

Routledge, *Catalan Dictionary English-Catalan Catalan-English*, Routledge, London, 1994.

田村毅ほか編 (2005) 『ロワイヤル仏和中辞典第2版』 旺文社、東京。

山田善郎ほか監修 (2015) 『スペイン語大辞典』 白水社、東京。